Fukapon

絵: だれもない

セレクトティブ・ チョコレート

さんしまいはみかんせい

三姉妹は未完成 (上)

改めて思う。学年が変わっても、何も変わらないんだなって。私が三年生になって、早一週間が過ぎた。いよいよ三年生、高校を出て行くことも考えるべき学年だが、私は相変わらず、放課後の音楽室でピアノを弾いている。

ふと訪れるときがある、思惟の時。身体が覚えてしまった楽譜は延々と鳴り続けるけど、心は演奏と別のところにあつた。これと言った悩み事があるわけでもなく、何か画策するわけでもなく、とにかく身の回りのあれこれで頭がいっぱいになってしまう。

「春だから、かな。」

手を止めて虚空に眩くと「うん、そうだな」と妙に納得がいつて、鞆の中から新たな楽譜を取り出した。譜面台に乗せるそれは真つ新で、春にふさわしい気がする。六月末に通っているピアノ教室の発表会がある、それまでに弾けるようにならないと。

夕日で明るい音楽室の中、少しきこえない演奏を始めた。今度はすつと、心が演奏の方へ向いた。

初見の譜面なのでつつかえながらも、何度か通しで弾き終えたとき。ピアノの先、入り口の横に人がいる。誰だろう？

体育座りで、頭が「くてつ」と右側に折れている、可愛い小さな眠り姫。見たことのない女の子、一年生かな。制服であればりポンの色で学年がわかるけど、体操服であるジャージは全年学共通。なので、ジャージ姿の彼女の学年はわからない。た

だ、ちっちゃくてとても可愛い。

私に何か用があるのだろうか。うちの高校には音楽部や吹奏楽部といったものはなく、放課後の音楽室を使っているのは私、津村千絵里（つむら ちえり）ただ一人。だからこの時間にごへ来るってことは、私に用があるってことじゃないかと思うんだけど。寝ているんじゃ聞きようもないな。

あまりに可愛い寝顔に、せつかくたからと鍵盤を叩き出す。ヨハネス・ブラームス作品九十一番『二つの歌曲』より、聖なる子守歌。寝ている子に子守歌もないか。なんて思っていたら、短い曲の間にお姫様はお目覚めのご様子。

「おはよう、お姫様。」

私がいたずらっぽく挨拶をすると、彼女は寝ぼけることなく飛び起きた。

「え、あつ、す、すみません。そ、その、たまたま前を通りかかったら、えと、あの」

「慌てなくていいよ。入ってはならない場所でもないし、寝てはならない場所でもないから。はいっ、これでお口拭いて。」

熟睡だったのかな。頭が傾いていた方へ、涎が少しばかり垂れているのを見つけちゃった。大慌ての彼女を制するべくピアノを離れ、スカート下のポケットから取り出したハンカチを差し出した。桜色の可愛いそれは私の手から小さなお姫様の手に渡ると、びつたりの色合い。私に桜色は似合わないか。

そんなどうでもいいことを考えながら、私はどんな顔をしていたのだろうか。ひよつとして、怖い顔？ 彼女は落ち着きを取

り戻すことなく、うわずつた声で答えていた。

「そ、そんな、結構です大丈夫です私も持つてますから、えと、あの、その、あ。」

ポケットに手を入れて、着ているものが制服でないと気付いたみたい。しまつたという顔をしていた。体操服にはハンカチを入れておかなかつたのね。何もそこまで予測していたわけじゃないけど、せつかくだから使ってくれたらいいのに。もう少し落ち着いてもらえるように、できる限りの笑顔とともに、一杯の優しい声で提案する。

「気にしないで使って。」

もう少し気の利いた科白でもあればいいのだけど、うまく思いつかないのが私らしい。それでも目の前のお姫様は多少落ち着いたらしく、こくと俯いて口元をハンカチで押さえてくれている。そんな姿も凄く可愛くて、お姫様と形容したのはまさに大当たり、なんて思っていたら。

「ありがとうございます。あ、あの、これ、洗って返します。」

今度はおどおどしながら私にお礼を言ってくれた。こういうのがきっかけで恋が始まるのって、少女漫画なんかではよくあるらしい。確かに私が王子様だったら大ありかも。でも、現実の私はどうがんばってもお姉様だからね。

「ううん、いいのよ。気にしないで。」

屈み込みながら、とにかく、極力優しく、彼女の手に私の手を重ね、ゆつくりとハンカチを抜き戻す。

けれども彼女があまりに申し訳なきさそうにしているので、そ

のまま立ち上がるわけにもいかず、視線の高さを合わせて少しお話することにした。

「えっと、どうしてここにいたのかな？ あ、別にいやいやいってことではなくて、お客様が来たのは今日が初めてだから、気になつて聞いているの。」

「え、あ、その……。前を通りかかったら綺麗なピアノの音が聞こえて、それで……。」

入つて聞いていたら寝ちゃいました。そうは言いづらいのだろう。演奏している側に見れば、寝てもらえるなんて最高の評価、とても嬉しい。でも普通に考えたら、寝ちゃつたら失礼か。

「そっか、ありがと。もしよかつたら、またいつでも来てね。」

聴いてくれる人がいると、私も嬉しいから。」

「は、はい。その、ご迷惑でなければ。」

「うん、全然迷惑なんかじゃないから。いつでも、好きなときに入ってきて。」

「ありがとうございます。それじゃ、あの、私はこれで失礼します。」

身軽に身体を立ち上げると、見上げた位置でペこりとお辞儀。そのままの勢いでドアを開け放ち、彼女は音楽室から姿を消した。

いつも通り誰もいなくなつた音楽室には、弱いながらもまだ夕日が差している。六時か。時計を見ながら少し迷つたが、終わりにしようかな。そうだな、今日は裕子に振られちゃつたし、

早めに終わってもいいな。

鍵盤の蓋を閉じ、戸締まりをチェック、机に放り出していた鞆を持って電気を消す。音楽室を出て、鍵をかける。そして鍵盤を返しに職員室へ。いつも通りの流れ作業だが、今日はここからがちよつと違う。「今日は」と言うより「今日も」と言つた方がしつくり来るな、そう思つてしまふ私のこの気持ちは、幾ばくかのやきもちなのだろうか。

「失礼します。」

「あら、どしたの？ 倉田さんに振られたの？」

この人は知つてて言つてるな。こういうときはさらりと受け流すに限る。が、そうできるほど大人でもない。

「その通りです。裕子は先に帰つちやつたので、高子さんと一緒に帰ろうかなと。」

「何よ、私は押さえ？ 本命は別にいますと言われて、悲しむとも思つたのかしら。」

高子さんの場合これが本気だつたりするから、いささか恐ろしい。自分が好きな人に少しでも好いてもらえるのなら幸せじゃない。そんな説教をいつか受けそうな気がする。

いつもだつたら挨拶に寄る程度なのだが、高子さんの言う通り、今日は裕子に振られてしまつたので来ている。ここは保健室、そして迎えてくれた白衣の女性は本校の養護教諭、小野原高子（おのはら たかこ）先生。いろいろあつてと言うか、ひよんなことからと言うか、とにかく今では私のお姉さんみたい

な人。そして高子さんにとつて私は妹みたいな存在。私が「高子さん」と呼び、先生が「千絵里」と呼ぶのは、そんな関係だからだ。

高子さんは紅茶が好きで、保健室には不似合いなティーテーブルを鎮座させている。私はいつも通りその椅子にかけると、ふんわり甘い香りのクッキーが並べられた。そして間もなく紅茶が出される。お茶会の準備は完了。

「今日はミルク切れなのでストレート。ドアーズのオータムナルよ。」

「ありがとうございます。新しいの買つたんですね。」

「ええ、先週で前のが切れたから、昨日買つてきたのよ。それで、やつぱりデートなの？」

紅茶の香りをくゆらせながら、あつさりと聞いてきた。やはり避けられないか。と言うより、この話をするために来たようなものかも知れないけど。私もティーカップに口をつけて、あつさりと話し出そう。

「デートです。三日連続ですよ、あの二人。しかも土曜日は伊吹から、日曜日は裕子から電話での報告付き。裕子なんか昨夜の幸せいっぱいな雰囲気今朝にまで持ち込んで、今日は一緒に帰れないからつて。私の気持ちなんかお構いなし。」

「そりゃご愁傷様。もうキスしたつて？」

「昨日の電話がそれでしたよ。」

努めてあつさり、けろりと、何事もなかったように。そう思つたつて、そう言えるわけはない。私の声は明らかに曇つて

いたし、呼応して高子さんの表情にも多少の翳りが見える。

「そっか。仕方ないわね、つきあつてるんだもの。」

「わかつてはいるんですけどね。聴いたとき、泣きそうになっちゃいました。」

「困つたわねえ。千絵里、私と同じ道を歩んでる。姉としては、早く道を踏み外して欲しいんだけど。」

クッキーに手をつけながら、高子さんまで涙目になつていて。私たちはなんで、こんなに辛い思いをしなければならないのだろう。人を好きになることが幸せだなんて、大嘘だ。淡く湯気の立つ紅茶の味は、いつもより素っ気なく感じられた。

しばらくの無言を経て顔を上げると、高子さんは案外の笑顔。

「でも私と同じなら、私と同じように元気になるわ。ねえ、今度の日曜、デートしない？」

そして間髪入れずに私は手を引かれ、なぜかある姿見の前に立たされた。

後ろに立った高子さんは、私の目の前に洋服を広げている。

「似合いそうだったから買っちゃった。うん、びったり、可愛い。これ着てどっか行こっ。」

「ちよ、ちよっと、いくら何でもこれは着られませんよ……。」

と言いながらもとりあえずは鏡に映つた自分の姿を見ていると、不思議と可愛い。自分じゃないみたいでちよっと新鮮。明るいミントグリーンの、少女趣味なワンピース。至る所に施された純白のフリルが全然私向きではないんだけど。

「ねっ？ 似合うでしょ。千絵里は顔も身体も綺麗に整つて

から、何着ても似合うのよ。可愛い服を着れば、とつても可愛い。」

「……ずるいです、そんなこと言われたら嬉しくなっちゃいます。」

「あら、そういうこと気にするのね。」

「別に、気にしているわけではありませんが……。」

友達に可愛いつて言われるのは、少し恥ずかしくて、少し嬉しい。私がどれだけ可愛くない人間かを知っているのに、可愛いなんて。高子さんから褒められても、やっぱり、素直にありがとうとは言えないな。

結局私は、高子さんからの贈り物を片手に帰途についた。気に入ったのかなあ。自分でも何を考えて受け取ってしまったのかわからない。今までにない感覚が、そうさせたとも言おうか。今までにない、か。それが、高子さんとの関係なのだから、当然かな。

今日も電車は、そんなに混んでいない。乗客は本を読んだり、眠ったり。誰も私のことなんか見ていないし、そもそも私は大きな紙袋を持つているだけの高校生。けれどもその中身がある洋服だと考えるとどうにも落ち着かないまま、いつもより長く感じられる帰り道を楽しんでいた。

翌日、彼女は現れた。ドアが開く音に今日は気付き、演奏を続けたままピアノ越しに会釈する。彼女の方もにっこりとお辞儀をして、入り口そばの席に座った。視線を譜面に戻す途中で時計を確認すると、まだ十七時になっていない。もしかして彼女、昨日も一時間近くいたのだろうか。

ちらちらと彼女を見る度に、じつとこちらを見つめる、キラキラした瞳が目に入る。人前でピアノを弾くことに慣れていないわけでもないが、これはさすがに。でもその瞳に映っているのが、ピアノを弾いている私なんだと思うと嫌な気はしないな。私もかつて、同じような瞳をしていたんだと思う。私が叩いてもただ単に音がするだけ。なのにピアノの先生が弾くととても綺麗な音楽になる。凄いなあ、いいなあって、純粹に見つめていたことがあった。彼女が小さくて可愛い子だから、余計にその姿と重なるんだろう。今の私はそんなにうまく弾けていないけど、彼女にとって素敵な時間になればと思ひ、鍵盤から鍵盤へと指を運び続けた。

——パチパチパチパチ……

たつた二人だけの部屋に、たつた一人だけの拍手が響く。夕日の中の音楽室は、なんだかとても暖かかった。

「どういたしました。今日も来てくれたんだね。」

「あ、はい。とても素敵な演奏でした。」

椅子を立てて彼女の方に歩むと、彼女もすつと立つ。思った通りとても小さな子で、彼女の頭は私の顔にも届かないかな。

けれども一年生ではなく二年生みたいだ。今日は制服で、そのリボンの色は二年生の赤だった。

「そんな大したものじゃないのよ。そうそう、自己紹介がまだだったね。私は三年一組の津村千絵里。」

「あ、えと、私は、二年四組の三重野紬希（みえの つむぎ）です。よろしくお願ひします。」

「うん、よろしくね。」

ついつい笑顔になりながら、もちろん笑顔になっちゃ悪いことなんてないんだけど、すぐそばにあった椅子を引つ張つてきて三重野さんの前に座った。あわせて座つた彼女と、ちよつと話してみようかな。

「三重野さんもピアノ、好きなの？」

「いえ、えあ、そういうんじゃない、音楽なんて全然できないし、ピアノも弾けないし……。」

「いいのよ、別に。ピアノを弾けなきゃいけないってことはないんだからさ。」

「あ、はい……。」

緊張でがちがちの様子だけど、楽しそうにしている顔には見えた。音楽が好きとかピアノが好きとかじゃなくて、多分、たまたま聞こえてきた音が気になっただけなんだろうな。それで入ってきたら、たまたま好きな感じだった。それでいいんだけどな、言いつらいのかなあ。

「そんなに緊張しないで。んー、まあ、一応先輩だけど、友達ぐらいに思つて。ね？」

「え、でも、そんな……。」

「あらら、私ってそんなに怖いかなあ？」

「そうやっておどけてみせれば、返ってくる答えは決まってる。」

「そ、そんなことないです。あの、でも、私人見知りです。その……。」

「大丈夫、わかるから。頷くだけでもいいから、少しお話ししましょう。」

「あ、はいっ。」

「まだまだ堅いながらもこつと笑った表情は、久しく見たことのないような、本当に可愛いだけの笑顔だった。純真無垢、天衣無縫という言葉をそのまま表したかのよう。こんな可愛い笑顔の子がいるんだ、って本気で思っちゃうくらい。」

「笑顔、可あ愛いっ。」

「と、つい言ってしまうくらいに。こんなことを言われたら余計に緊張しちゃう、何をどうしたらいいかわからなくなるって知っているのに。」

「案の定頬を染めて俯く彼女に、謝ったらもつと困るんだろうなってわかってるのに。」

「ごめんさい、あまりに可愛かったから。じゃあ、退屈な話なんだけど。」

「大した話をしたわけでもなく、それどころか彼女は頷いたり首を振ったりするだけだったけど、気付くと夕日はだいぶ傾い

ていた。」

「私ばかり話しちゃってごめんね。その、もしよかったら、明日からも来てくれると嬉しいな。こんなに広い部屋に一人じや、寂しいもん。」

「はいっ、その、ご迷惑でなければ。」

「うん、全然迷惑じゃないよ。大歓迎。」

「あの、それじゃあ、失礼します。」

「席を立ちべこりとお辞儀をする彼女に、私は笑顔で手を振った。」

「うん、ばいばい。また明日。」

「その後もしばらく笑顔のままだったのは、彼女の影響だよ。」

「今日は運良く、あるいは運悪く、裕子の予定が空いている日。」

「以前と同じように裕子と並んで歩く通学路、以前と違うのは裕子なのか、私なのか。」

「恋すると毎日何でも楽しくなるって、ホントなんだねえ。何なんだろうね、とにかく楽しくて、何でもできちゃいそうな気分。」

「間違いない、変わったのは裕子の方だと思う。」

「今や重い恋の病に冒されているのは、私の友達、親友と言ってもいいであろう倉田裕子（くらた ひろこ）。一つ年上の、大学一年生の恋人がいる。と言うより、去る三月の卒業式の日、恋人になった。相手は根谷伊吹（ねや いぶき）、こっちは私

の幼馴染みだ。おかげさまで毎日のようにのろけ話を聞かされる。今もその真つ最中。

「だからさ、ほら、千絵里も恋した方がいいよ。」

「はいはい、そうね。できるものならしたいんだけどね。」

恋する女の子は誰にでも恋を薦めたがるつて、ホントなんだねえ。そう毒づいてやりたいけど、病に冒された人には怖いものなどないらしい。どうせ聞いているだけで痛くなるようなのろけ話が返ってくるのだろう。可も不可もない応答をするのが一番だ。

それでもやっぱり裕子は、楽しそうにしゃべっている。もともと裕子つて、こんなにししゃべる子ではなかった気がするんだけど。そう思わせるのは羨ましさからかも知れない。

そう、羨ましいだけ。だから裕子がこうやって浮かれていること自体は悪くない、見ていて私も楽しくなる。恋を試してみたいとは思わないけれども、こうやって毎日本当に幸せでいられるようになるなら、恋でも何でもしてみたいと思う。今が特に不幸せつてわけじゃないんだけどさ。

「ところでさ、千絵里。」

「何？」

突如声のトーンが変わり、私もきょとんとしてしまった。

「私たちちつてキスの後、どうしたらいいのかな。」

「……好きにしろ、そんなの。」

ため息の一つもつきたいところだ。確かにこの二人の場合、ちよつと大変かも知れないけど……。

放課後になると私は、彼女が現れることを楽しみにしていた。一人でいることが寂しいわけでも嫌なわけでもないけど、好きな誰かと一緒にいられるならそちらの方がいい。彼女も私のことを嫌っているわけじゃないみたいで、今日でもう五日目。毎日まちまちの時間に訪れて、演奏を聴いて、ちよつと話して帰る。それだけのことなんだけど。今日も来るのかな、三重野さん。

「来るのかな」という言葉とは裏腹に、私は今日も来ると信じていたりする。だつて今日は、プレゼントがあるんだから。

気もそぞろに鍵盤を叩いていると、音を立てずにゆつくりと、彼女は入ってきた。どうせだつたら「こんにちは」つて挨拶してくれたら、演奏を止めやすかつたんだけどな。彼女の気遣いに残念な思いをしながら、楽譜をすつ飛ばして早々に切り上げることにしよう。

演奏を終えるといつも通りにたつた一人だけの拍手が鳴っている。今度は私が、彼女にその拍手をしてあげよう。そう思いながら歩み寄つた。

「こんにちは。」

「こんにちは、先輩。」

「あのね、今日は三重野さんにプレゼントがあるの。」

「プレゼント、ですか？」

我ながら情けないもので、待ちきれずに言ってしまった。そして彼女の「？」と頭に浮かんできそうな表情に顔が綻んでしまった。

「うん。これ。」

プレゼントという割には何ともパツとしない、古ぼけたものなだけだ。私が差し出した一冊の本に、彼女はどう反応したらいいか迷っているみたい。ぼかんとした表情がまた可愛くて仕方がない。もう少しこのままでいようかな。そんな意地悪なことを考えながら。

「せつかくだから、ピアノ、弾いてみようよ。私のお古だけど、よかつたらこの楽譜、受け取って。」

子供向けのバイエル教則本。高校生からピアノを始めるならこれは退屈だろう。でも手が動かせるようになるまで、短い間のパートナーとしては悪くない。そう結論づけて持ってきた。

どうやって渡そうかというのももちろん考えていて、彼女が躊躇するであろうこともお見通しだから。

「え、でも……。」

「いいからいいから、ねえ、こつち来て。」

手を引つ張りピアノの前に連れて行き、彼女を椅子に座らせると、私はその後ろから抱きかかえるように右手を構えた。

「三重野さんの右手、貸して。」

戸惑っている彼女を気にせず、その右手を私の右手に重ねる。左手も構えて「それじゃあ、いくよ」と耳元で小さく声をかけ

たら、ゆつくりと、最初の白鍵を叩いた。きつと彼女も知っているであろう旋律が、二人だけの音楽室に響いている。

『エリーゼのために』、誰でも知っているピアノ曲。割と簡単な曲なので、少し練習すれば弾けるようになると思う。きつと彼女の最初の目標にもびつたりじゃないかな。右手の上の右手が、何となくでもついてこられるようにゆつくりと、ハッキリと弾き、程なく演奏を終えた。

「ね？ これなら少し練習すれば、弾けそうでしょ？」

お疲れさまと右掌を返して、三重野さんの右手と恋人繋ぎ。繋いだ掌は、とてもちつちやくて可愛い。こんな小さいとピアノ弾くの、大変かな。そんなことを思いながら彼女を覗き込んだ私の顔は、満面の笑みに違いない。

笑顔はとびつきり可愛い、でもどんな顔もとっても可愛い。彼女の困った顔があまりに予想通りだったので、お構いなしに思惑通り進めてしまう。そんな自分を見て気付いてしまった。なるほど、高子さんもこんな気持ちだったんだなって。

「よくできましたあ。」

「は、はい、ありがとうございます。」

バイエルの一番、単純な運指の練習。それでも初めて弾けたときって、嬉しかったな。彼女もそう思っていてくれていると嬉しいな。完全に浮かれている私の声と、緊張の抜けない彼女の声と。どうにもちぐはぐな感じだけど、そのうち打ち解けてくれるよね。私は譜面台の楽譜を閉じながら、勝手に楽しそう

にして、話し出してしまおう。

「しばらくこの本で練習したら、さっきの『エリーゼのために』をやるうね。三ヶ月くらい？ もう少しかな？ そのぐらいで弾けるようになると思うから。」

「でも、その、私……。」

「ピアノ、嫌い？」

ちよつと寂しそうな顔をして、首をかしげで。なんてずるい聞き方をしているんだろう。私、いったいどうしちゃったのかな。でも答えはやっぱり予想通りで、ますます調子に乗っちゃう私の。

「そ、そんなことありません、けど……。」

「けど？」

「私なんか弾けるわけありませんし、その、うちにピアノもありませんし……。」

「大丈夫よ、弾ける、私が保証してあげる。ピアノはここにあるんだから問題なし。私が毎日弾いていて、三重野さんが弾いちゃいけないなんてことはないんだから。」

「そ、そうでしょうか……。」

「うん、そうだよ。じゃあ、次は月曜日ね。」

頬に赤みが差した彼女に、私は優しく楽譜を手渡した。

「ダメよ、何も知らない下級生に手を出したりしちゃ。」

「そんなんじゃないよ。こんな妹がいたらいいな、妹に

なつて欲しいなつて。」

金曜日の夜ともなれば当然裕子には他の予定があり、私は例によつて保健室にいる。お茶と甘いものを並べて、三重野さんのことを話していたところだ。

今日は保健室に入ったとたん「何にやけてるの？」と聞かれたほどで、やっぱり相当嬉しい、幸せな顔をしていたらしい。自分でも十分にわかつていたつもりだが、他人から一目瞭然というレベルだとは……。

「なら、わかるわよね？ 私が千絵里に洋服をあげた気持ち。」

「意地悪です。それをここで持ち出しますか。」

「あーやっぱりね。明日着ようかどうか、まだ迷つてたんでしょ？ ダメよ？ 着てこないよ。」

「ちゃんと着ますよ。今となつては言う通りです、着ないなんてできない……。」

だつて、高子さんの気持ちがわかるんだから。言うなれば確信犯。それは愛情の押しつけかも知れないし、自分勝手な好意かも知れない。確かに自分の嬉しい気持ちがいつばいで、抑えきれない贈り物。けれども、あなたに喜んで欲しい、幸せになつて欲しいつて心から願っている。贈る側になろうと、贈られる側になろうと、私にとつては特別で大切な気持ちだから。

「先生らしいことを言えば、そうやつてたくさんの気持ちを経験するのは大切なことよ。でも、本当にたくさんの気持ちを経験した方がいいのかしらね。繰り言だけど、私の気持ちなんかわかるようになつて欲しくないの。辛いだけだつて、知つてる

でしょ。」

こう言うときの高子さんは、どこかに暗さを残すこともあるけど、たいていは笑顔だ。晴れ晴れしいまでに、笑顔。何を思えば笑えるのかわからないけど、それが年齢の、経験の差なのかなって最近では思う。本人にそう言うのと、私もまだ若いのに、純潔なのにつて拗ねたりもするけど。

辛い気持ちは知らない方がいい。確かに、知らないでうまくいくなら、そうなんだと思う。けれども、私たちはもう選んでしまった。どうやっても、幸せになれない道を。だったら早いうちに、辛いことも知った方がいいのだろうか。

「私が千絵里に願うことを、千絵里はきつと三重野さんに願うわ。そして今の私の気持ちがあわかつたときには、手遅れなんだけどね……。」

「そのときは高子さんが、慰めてくれますよね？」

「そうね、妹の涙を拭くのも、姉の務めかしらね。」

お互いにいたずらっぽいな笑みを交わして、結局はここに戻ってくる安堵と落胆を再確認した。口をつけたティーカップからは、甘さ不足のミルクティーが流れ込んでくる。

「さて、と。そろそろ帰りましょうか。」

「そうですね。じゃあ、カップは私が片付けます。」

すっかり勝手を知った保健室、カップを洗うと所定の場所に片付け、ティーテーブルをざつと拭いた。台布巾を洗って窓際に引っかけたら、ちょうど高子さんも帰り支度を整えた。

部活が盛んな高校ではないため、十九時を回ってしまった今、校内には人影などない。さすがに職員室には灯りが点つているけど、残っている先生はあまり多くない。

そんなことから駅までの通学路にも、歩いている人はまず見あたらない。閑静な住宅地と言えそうな場所にある高校なので、朝と夕方だけ人がたくさんと言ったところ。日が暮れて暗くなつたら、女性一人で歩くのはためらわれる道だ。しかし意外と、この通学路で痴漢の類が出たという話を聞かないのはなぜだろう。

「さあ、なんでかしらね。可愛い女子生徒が少ないからじゃない？ 教員もろくなのいないし。」

隣の方は先生と思えぬ結論を出している。本気でそう思っているのか、暗い夜道で二人、ぶらぶらと歩いている。この歩みだと駅までは二十分程度かな。朝だつたら十五分の道のりなんだけど。

「ひどいこと言いますねえ。高子さんは綺麗で狙われそうじゃないですか。」

「そう？ 見るからに跳ねつ返りじゃない？ 典型的な男性つて、おぼこで言いなりになっちゃうような子が好きなんじゃないの？」

「なるほど。何となくわかるかも。」

「ここは『そんなことありません』つて言うところなんだけど。」

「んー、そんなことありません？」

こんな話題で気付いたのは、私も、きつと高子さんも、男性

がどんな女性を好きかということをちゃんと考えたことがないということ。これは経験した方がいいことなのか、しない方がいいことなのか……。

「全く気の入らないつこみね。まあ、いいけど。さつきの話じゃないけど、痴漢になんて遭わない方がいいもんね。」

「ですね。大切なものは、大切な人にあげたいですから。」

「……千絵里、そういう冗談はダメよ。私に似るから。」

妹なんだから、当然ですよ。けれど、妹に似て欲しくないというのは、今やわかってしまう気持ちでもある。三重野さんが私に似るようなことはあつて欲しくない。やはりそう、思つてしまう。

よく晴れた土曜日。たまたま駅近くにあつたバスタ屋で遅いお昼を食べた後、私たちは何の目的もなく、何があるわけでもない道を歩いている。

「いい天気でよかつたわね。」

「ですね。こういうデートも意外とありがたいかも知れませんね。」

「でしょ？ 思いつきにしてはあたりだと思ふのよ。」

「でも、可愛い服を着ている意味はないんじゃない……。」

「そこは気分の問題よ。デートなんだから、おめかししなくちゃ。」

「確かに、そんな可愛い服を着ている高子さんに言われると、反論できません……。」

「もう言わないでよ、それ。恥ずかしいんだから。」

休日に早起きは無理だからという理由で、私たちは十三時に学校の最寄り駅で待ち合わせた。そこで高子さんが取り出したのは、サイコロ。立方体の六面ダイスだ。

そもそも、デートなのに早起きが無理などと言っている時点で私たちには問題があつただけ……。サイコロで出た目の数だけ先にある駅で降りて、適当にお散歩。なんてとんでもない企画。普通の女の子が恋人からこれを言われたら、怒るだろうな。お互いにそんなことを思いながらも、「私たちなら問題ないよね」と嬉々として始めてしまった。

結局出た目は六。下り方面へ六駅乗つたところで降りて、無意味に歩き出した。地図がないため、どつちに行けばどうなっているのかもわからない。もちろん、今まで来た道を覚えていないので、どうやって帰るかもわからない。とは言え帰りは、携帯でタクシーでも呼べばいいよねとお気楽な構えた。

「ふふっ、高子さんって意外とそういうの好きなんですか？」

『意外と』は余計よ。誰かが着ているのを見るのは好き。せっかくだから千絵里とおそろいで着てみようかなって。でも、もう二度と着ないわ。」

「えー、そんなのもつたいないですよ。結構似合ってますよ？」

「そうだとしても恥ずかしいから着ない。」

高子さんが散々恥ずかしがつている今日の服は、ローズビンのクスのベビードール風ワンピースに白に近いピンクのブラウス。ワンピースのスカートは意外と短くて、膝上十五センチくらいかな。世間一般の女子高生に言わせれば長いと言われそうだが、私にしてみれば短い。高子さんに見たらなおさら……。

待ち合わせのときに歩いてきた高子さんは本当に落ち着かない様子で、よつぽど恥ずかしかつたんだと思う。でも今は人目もないようなところだからか、なんだかんだと楽しんでるんじゃないかな。服だけじゃなくて、笑顔まで少し幼くて、いつもの高子さんとは少し違っている。

「千絵里は恥ずかしくないの？ その服。」

「最初は落ち着きませんでしたけど、恥ずかしいってことはありませんよ。思っているほど見られてはいないものなんです。だから自分が楽しんでさえいいたって。」

「言ってくれるわねえ。それじゃまるで、私が自意識過剰みたいじゃない？」

どちらからともなく手を繋いで、何となく歩いたり、立ち止まったり。

春らしい暖かな日差しに包まれて、まるで本当の姉妹みたいに。それとも、ひよつとしたら恋人みたいに。私たちは穏やかに時を過ごしていた。

「んー、どうでしょう。改めて見ると、年齢と服のギャップが悲惨かも。これは注目の的だったかも知れませんが。」

「ちよつと、私まだ二十代よ？」

「あと何ヶ月か、ですけどね。」

「その何ヶ月かが大切なよ。千絵里もじきにわかるわ。」

保健室で紅茶を飲みながら話しているのと、そう違わない話をひたすらしていた。高子さんはわかつてたのかなあ。場所がどこでも、二人なら楽しいんだって。

今日着ている洋服のこと、さつき食べたランチのこと、音楽室で出会った女の子のこと、高子さんを誘いに来る先生のこと。もちろん、私たちの好きな人の近況と、行く当てのない想い。

正直言っちゃうと、半分以上は楽しくない、辛い話だったと思うな。でも高子さんと話しているとあまり気にならなくて、気付くと数時間が経ち、それにしても多少と言える距離だけ駅から離れていた。時計は十六時半を指している。

「そろそろ戻るか。ここからなら、何となく逆戻りすれば日が暮れるまでに戻れそうじゃない？」

「そうですね。じゃあ、引き返しませうか。」

「ダメよ、何言ってるの？ 同じ道なんておもしろくない。次の角を左に曲がつて、また次の角を左に曲がつて戻りませうよ。」

「それでも、構いませんけど……。そういうときに限つて次の角が見つからなかつたりするんですよ。」

「千絵里は心配性が過ぎるわ。そんなんじゃ長生きできないわよ？」

しかしどうやら、私の心配は過ぎたるものでもなかつたらし

い。

私の心配を超えるほどに、「次の次の角」がやってこない。

ふと思い起こせば、「次の角」を曲がる前からそうだった気がするんだが……。

「この家、やたらと大きくありませんか？」

「やっぱりそうよね？ さっきからずっと同じフェンスが続いてる……。家なんか見えないけど、奥は家なのよねえ？」

そう、ずっと同じ、白いフェンスが続いていた。新しくはないと思うけど、よく手入れされているのだろう。綺麗な白を保っている。フェンスは胸元程度までの高さで、その中もよく見えた。たくさんの木々が植わっているが、とても整然とした印象だ。何がそう思わせるのかわからないが、新緑には少々早いこの季節に、とても綺麗な光景を作り出している。

「いるんですねえ、お金持ちって。」

「そりゃまあ、いるんでしょうねえ。」

そんな浅薄な感心しかしようがないときに、これまた何とも言い様のないものが通り過ぎていった。

「凄いなね、このおうちの車？ ……私のバイク、何台分かしら。」

「事故車と比べるのは申し訳ないと思うんですけど。」

「うるさいわね、それでも可愛い愛車なのよ。」

そんなことを話していても上の空。やっぱり考えていることは同じ。意外と近くで止まったそれを見ているとどうしたかって思ってしまう。

「どうします、あの中からお嬢様とか出てきちゃったなら。」

「そうねえ、どうしようかしらねえ。あー、写真でも撮ろっか。」

「いいですね。でもお付きの人とかに怒られそう。」

「あー、執事ってヤツ？ 羨ましいわねえ。でも私はメイドの方が」

そんなバカなことを言っていたら。

本当にお嬢様が登場した。

左のドアを開けて軽やかに出てきたのは、オフホワイトのフレアスカートに瑠璃色のカーディガンを着た女の子。私と同じ年ぐらいだろうか。うああ、お嬢様だあって思ってしまったけど、よくよく見れば結構普通の子かも。低めの位置で一つ結びした黒髪が、妙に親近感を湧かせる。

とは言えやっぱり、どこことなくお嬢様の風格というのがあるのかも知れない。私も高子さんも、言葉を発することを忘れ見入ってしまったている。

そして一つ結びのお嬢様が開けたドアを押さえていると、もう一人、中から女の子が現れた。瑠璃色のプレーンなノーズリーブラウンピースに真っ白なブラウス。一つ結びの子と違って華はないけど、落ち着いた感じで育ちの良さそうな子だ。洋服の色がおそろいなところを見ると、姉妹なのだろうか。肩につくつかないかの綺麗なセミロングはやはり黒髪で、身体の動きにあわせてさらさらと滑り動いている。

「あつ、こっち向いた。」

高子さんが呟くと、ワンピースの子はこちらに走ってきた。

「津村せんばあいつ。」

……あれ？

私のこと、呼んでる？

あつと言う間にやってきた女の子は、

「……三重野さん？」

「はい、こんなところでお会いできるなんて偶然ですね。何なさってたんですか？」

「ホント、偶然ね……。びつくり。私は高子さん、あ、えーと、この人と散歩してたのよ。三重野さんこそ……。もしかして三重野さんって、このおうちの人の？」

左手に広がる邸宅を指差しながら、ついつい聞いてしまった。しかし何時も言ってるから気付くもので、お嬢様じゃなければなんだと思っていたんだ？ と大変失礼な物言いだな。少々申し訳なさそうにしていた私に、彼女は意に介する様子もなく、つい見とれてしまう、キラキラの笑顔で答えてくれた。

「ま、まさかあ。そんなことあり得ませんよ。お嬢様なのはあつちの瑠璃で、私はただ単に一緒に車に乗ってただけです。」

あちらの一つ結びの子に私が目を移すと、その視線の下では三重野さんはばたばたと手招きしてその子呼んでいる。

応じて歩いてくる女の子は、確かに本物のお嬢様かも知れない。何か特徴的なわけではないのだが、優美な歩き方で向かってくるのだ。遅いわけじゃないけれどもゆつくりと、オーバーな動作ではないけれども存在感があり、癖の全くない歩き方ながら女の子らしい。優美とはこのことかと改めて勉強させられ

る、お嬢様然とした歩き方。

「凄いわねえ、歩いているだけで違うわ。」

ぱかんと見つけている私の隣も、ひとしきり感心しているよう。

歩く姿に見とれていると、近づいてくる彼女の顔の輪郭が次第にハッキリしてきた。そうだな、言い方は悪いけど、思ったより普通。可愛いとか綺麗という尺度であれば、三重野さんの方が上かも知れない。

しかし彼女の居所はそんなところではなく。目の前までやってくると、さすがに慣れた風に挨拶をしてくれた。

「初めまして、津村先輩。三枝瑠璃（さえぐさ るり）と申します。よろしくお願いいたします。」

ひたすらに流麗な挨拶とは裏腹の、とても人なつこい笑顔。考えてみれば、いくらお嬢様だから先天的な造形がどうにかなるものではない。故にこの子が、本当にお嬢様として育ってきたんだなあと感じさせられる。

と、そんなことを感心している場合ではないな。挨拶をしないと。

「初めまして、三枝さん。津村千絵里です。」

「袖希から伺いました。今度私にも、ピアノを聞かせてくださいね。」

「あ、それで私の名前を……。大したものではありませんけど、よければ、三重野さんと一緒に音楽室に来てくださいね。」

「ところで失礼ですが、お隣の方は保健の小野原先生ではあり

ませんか？」

「えっ？ そんなんですか？」

三枝さんがあつさり放つた問いに、後ろに控えていた三重野さんが驚いている。

そりやそうだ。休日に私と散歩している、こんな格好の女の子が保健の先生だとは普通気付かないだろう。高子さんとて、そう思つて何も言わずにいたんだろう。今日の格好を恥ずかしがつていたし……。

「あらら、バレちゃつた。ご明察、小野原高子です。三枝さんとは健診のときしか顔を合わせていないと思うんだけど、よく覚えてるんですね。」

「いえ、何となく、そんな気がして聞いてみたんです。」

「うあー、瑠璃凄いいねえ。私は全然わかりませんでした。あ、三重野先輩のことも最初わからなかつたんです。だつて、学校のとときと全然雰囲気が違うから。」

今の私たちにとっては、痛恨の一撃。

「お二人とも、とてもお似合いたと思います。」

「いつもはそういう可愛いお洋服を着てるんですか？」

そして連打。お嬢様に気を取られていて、自分たちの格好をすっかり忘れていた。

割と可愛い服装の彼女たちの前でことさら恥ずかしがることはないのかも知れないが……。彼女たちと違つて、中身との不釣り合いが否めないだけに、居心地が悪くなつてしまう。さてどう答えたものかと弱つてみると、高子さんが代わりに答えて

くれた。……高子さんとて、余裕はない様子だけだ。

「そ、そうねえ、まあ、たまには気分を変えてみようかなつて。それより二人とも、どこかに行く途中だつたんじゃないの？」

さすが先生、いわば教科書通りに話を逸らした。

三重野さんも三枝さんも、他意なく私たちの洋服を褒めていたのだろう。あつさりと高子さんの質問に答えた。

「紬希を夕食にご招待したんです。」

「そうなんです。」

「もしよろしければ、お二人もいかがですか。」

「いいの、瑠璃？」

「うん、紬希のための夕食だもん。」

三重野さん、友達同士だと普通の女の子みたいな話し方になるんだ。なんて興味深く思つていて、反応するのをすっかり忘れていた。高子さんが反応しなかつたら、全く間抜けな状況だつた。

「ありがとう。でも、突然じゃご迷惑だし、今日は遠慮しておきます。また誘つてくれないかしら。そのときは必ず、千絵里と一緒に。ね？」

「あ、はい。私でよければ、喜んで。来週でも再来週でも、予定は空いていますから。」

私たちの返事に、三重野さんが少し残念そうだつたように見える。私もちよつと残念だけれども、さすがに突然じゃ迷惑。そこで予定を添えて答えておいた。きつと高子さんも同じように考えていたのだろう。「そうね、私もがら空きだわ」との目

配せに私は軽く笑みを返した。

それではまたと立ち去ろうとしたとき、めっぽう明るい声が飛んできた。

「じゃあ、先輩、来週。来週ならいいですか？」

「わかった。約束ね。」

三重野さんのお誘い。もちろん私は即答。

「三重野さんって、三重野紬希さんだったのね。」

「お嬢様について」が一通り終わると、三重野さんの話になった。

土曜夕方の電車内は空いている。がらんとした車両に二人、隣同士で座席に座り、何に気兼ねすることなくさつきまでと同じように話を続ける。

「この前、そう話したじゃないですか。」

「まあ、そうなんだけど。」

「三重野さんのこと、知ってたんですか？」

「ええ。一応、養護教諭だもの。保健室に来た生徒の顔は覚えらるわ。」

ふうん。高子さんって、意外とちゃんと仕事してるんだな。

向かいの窓越しに見える夕焼けを眺めながら、何とはなしに聞いてみた。

「怪我か何かですか？」

「それは秘密。保健室でのあれこれは、千絵里であつても話せ

ないの。」

「ホントに仕事してるんですね、高子さん。」

「失礼ねえ。当然でしょう？」

電車は止まりドアは開けど、乗り降りする人はいない。

再びドアが閉じ走り出すと同時に、また話は続いた。

「三重野さんって、少しだけ暗い感じの子って印象があつたの。」

「そうなんです。私の知っている三重野さんは、どちらかというと明るくて元気、かなあ。」

「今日見た彼女は、私にもそう見えた。」

その言葉と同時に、私の左手に体温が重なつた。

「恋でも、したのかしらね。恋は人を変えるわ。」

私は体温の持ち主の方を向くと、すでにこちらを見て笑っていた。いたずらっぽいその笑み。だから違つて言ってるのに。

「でも、人を変えるのは恋だけじゃないわ。」

「来週、何着ていきましようか？」

きつと彼女は、今日みたいな服を喜んでくれるんだろうな。

あとがき

えー。未完成ってそーゆーことなのー？

とおっしゃりたい気持ちはお察しいたします。申し訳ございません。決してそういう意味のサブタイトルじゃないんだよう。

ハッピーバレンタイン、みなさま。何年ぶりでしょうね、中一ヶ月で作品をリリースするなんて。毎度毎度、最後までお読みいただいているみなさまには大変感謝しております。誠にありがとうございます。今回はこんなことになっておりますが、また次回以降も見捨てずに読んでやってくださいませ。

タイトルからおわかりの通り、本作は昨年のバレンタイン用（でありながら夏コミリリースになった）『セレクトティブ・チヨコレート』シリーズの続編です。前作セカンダリ・アイと同様に千絵里視点で描く、「恋愛つぼくて恋愛ものじゃない」お話。今回こそはバレンタイン付近でのリリースとなるため、甘かったり切なかったりの展開も用意していたんですが……。

間に合いませんでした。もともと無理なスケジュールだったせいもありますが、何より、最後の一週間で寝込んでしまう事態に陥ったのが大きかったです。ノロでもインフルエンザでもなかったのは幸いですが、中途半端に治ってしまったのが前日

土曜日にすら集中力を欠くという結果を招いた気も（謎）

言い訳はこの辺にして、それでも落とさないと決めた理由をちよこつと。今年は数出していこうと決めたんです。質と量を天秤にかけるなんてのは抜け口、まずは書いてから考えようよ。と初心に立ち返り努力しようという決意が、この二月のスケジュールだったります。故に、落とすという選択はなかったんですよね。

とは言え、さすがにここまで中途半端だと申し訳なくは思います……。夏までに何らかの形で、加筆修正しつつ下巻部分を足したものを出したいと思っています。

さて、ついに真の下級生キャラ登場。「ついに」ってほど続いているシリーズでもないのですが、やつぱり嬉しくなっちゃいますね。世界に不可欠なのはロリっつことだよ。千絵里お姉さんといいいことして遊ぼっ。とゆー展開になるかは秘密。袖希にとつての千絵里は、千絵里にとつての高子以上に「お姉さん」という感じがするので、あるとしたら瑠璃か。見た目は庶民派のお嬢様つてのは、百合よりもノーマルカップリングで味わいたいキャラなんですけどねえ。むしろ私とのカップリングで……。

「このカップリングがいい」というのがあれば、メールなんかでいたただけると嬉しいです。アイデアとしていたただくかも知れませんが（笑）

ではいつもより早めに、この辺で。今、前日の十九時なんですよ。まだ初稿なんですよ。どうしましうか。そんな感じなのですよ。

次は今月十八日、眼鏡時空5でお会いしましょう。

二〇〇七年二月、治りきらない身体とともに。

セレクトティブ・チョコレート 三姉妹は未完成(上)

Fukapon

2007年2月4日 初版発行

発行所 まにふいくみやほか

印刷/製本 project KAIGO 東川口分室

Copyright (C) 2007 Fukapon <fukapon@projectkaigo.org>

<http://www.projectkaigo.org/>